

---

# 素晴らしい、自由な世界

虹さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

素晴らしき、自由な世界

### 【Nコード】

N0062P

### 【作者名】

虹さん

### 【あらすじ】

『他世界性物質論』という説を提唱した。十七歳の天才量子学者、麻村玲。

世界という現実の概念はいくつもあるとする『多重世界論』を裏付けるこの説に多くの注目が集まる。

しかし、理論だけであるその説は多くの学者に否定された。

「自分の望んだ世界がそこにある」

そう思った彼は、異世界に渡る決意をした。

もともと、空想的世界に憧れていた玲は、なんでもできて、楽しい世界を望んだ。

着いた世界ではなんでもできた。二つのグループが争っていて、百度勝てば願いが叶う権利を得られるという。

戦い、友を得て、恋を知り、やがて世界の真実を知る。

翻弄され奔走し、成長していく。

青春系異能バトルファンタジー？！

## ブログ1（前書き）

初投稿、このサイト初心者の虹さんと申します。

稚拙な文章、誤字脱字などの至らぬ点は多々あることかと思いますが、読んでいただければ嬉しいです。

さて、作品についてですが、携帯からの投稿になりますから横書きで見にくいかと思います。

構成は工夫するつもりですが、そこはご容赦お願いします。

ストーリー自体は、異能バトル系の話で、しかし、感動な話に仕上げたいと企んでいます（笑）ふふふ。日常的な掛け合いも楽しきたいと思います。

読んでいただけるすべての方々に感謝し、頑張りたいです。

どうかよろしくお願いします。

## プロローグ1

冬。

寒さに凍えている街は、しかし、活気を失うことはない。

それはつまり人がいるということだ。

人々は、寒さに肩をすばませ、追われるようにそれぞれの道を急ぐ。クリスマスが近いためか、夜の街はネオンで明るく、着飾られていた。

「はあ……」

息を吐き出す。

白く濁ったそれは、すぐに個性のない色に変わってしまった。

繁華街を抜けると一気に人の気配が消えた。

自分を照らすのは僅かな月光ばかり。

街灯すら、ろくにありはしない。

私は街外れにある大学を目指していた。

脇にノートパソコンを抱え、誰もいない建物を見上げる。

近代の構造物らしく綺麗な外装をしていた。しかし、煌びやかさなどとは欠片もなく、芸術性は皆無である。

馬鹿でかい校門は勿論、閉ざされている。

端にある関係者用の小さな扉へと歩を進めた。

警備員の詰め所には明かりが灯っており、中では夜勤の警備員が船を漕いでいた。

私の姿をみとめると、はっとした様子で軽く会釈をよこしてきた。

時間が時間なので最初は驚いた様子だったが、私だとわかると笑顔で扉を開けてくれた。

「忘れ物ですか？」

「ええ……そんなところで」

お礼を残し、その場を去ると、また誰もいない世界に一人投げ出された。

## 常日頃

「あ、き、ら。朝よ」

「……またか、なにか用事でもあるのか？」

心地のよい目覚めとはあいならず、突然の来訪者によって覚醒を余儀なくされた。

「私は寝が浅いんだ、用事もなく起こすのはやめてほしい」

「つれないなー。あたしだって本当はいやなんだよ？」

嫌ならばこなければいい。そう言おうとするも、むんずと伸びてきた手に口を押さえられて喋ることは許されなかった。

「『ゆき、大好きだ。だから毎朝めしを作ってくれ』なんて言われたんだからくるつきやないっしょ」

手を払いのけ「なんだその頭の悪い台詞、誰がいったんだ」と訂正してから、ベットに腰掛けてこちらを見る由紀の顔を拝む。

二敷由紀という女性はある程度の抜けきらない印象はあるが、大人らしい雰囲気もまとうているという不思議な人物だ。

身長は自分よりも若干ひくいほどで、対した差はない。

髪は艶やかな黒。漆を塗ったかのような落ち着いた深い色だ。その美しい、絹のように流れる長髪は風に揺られるだけで目を引か

れる。

切れ長の眉毛に目鼻立ちもくっきりとしていて、化粧もなしに素直に美しいと感じる端正な顔は、自然なままでも輝くダイアの原石とでもいったところか。

しばし、茫然と顔を眺めていた。そんな私を由紀は首を傾げて見返してくる。

「なに？」

「いや、それでどうした」

「んふー、はいこれ」

ニコニコと不気味に笑いながら何かを差し出す。みれば茶封筒だ。特に変わった様子もなく、手に取ると中にはただ紙が入っていることが分かった。

「なにこれ」

「あなたのすべきことが書いてあります」

「なるほど」

合点がいった。いつも思うことだが、口頭で言えばいいものだ。

中身を確認すると、紙の中央にはどでかく『前線』と書かれていた。

私は視線を戻して今度は由紀を睨んだ。

## 常日頃1

「今回のミッションはいたって単純。撃破数を競い合います」

「悪い、日本語で頼む」

「今回の任務はいたって単純。撃破数を競い合います」

「わかったぜ!!」

メンバーの一人である上原光一は横文字がたいそう苦手であった。

いま居るのは、大学内の講堂。千人もの人数が同時に入れるほどの大きさであるが、たったの十人しか使うことがない。

備え付けの椅子があり、各々座りたい場所に楽な姿勢で腰掛けていた。

二敷由紀は壇上でこちらを見下ろしながら、作戦の詳しい内容を説明している。

「あたしが指揮するA班は遊撃に回るわ。支援が目的なので無闇な交戦はせず、後方で連絡を待つこと」

どこからか引つ張ってきたホワイトボードに簡単な地図を描いて流れを解説していく。

私は事前に作戦内容を聞いていたので、確認程度に聞いていた。

書くのに使っていた水性ペンの蓋を閉じ、指先で器用にくるりと回して服のポケットにしまいこむ。  
ジャージに身を包んだ由紀はホワイトボードを力強く叩くと、高らかに宣言した。

「あたしらの願いを叶えるわよ!!」

「「「おう!!」」」

関をあげ、私達は立ち上がる。

## 常日頃2

大きな川を挟んで、互いにテリトリーをもつチーム。西側にあるのが自分たちの陣地だ。

手に握った携帯電話を眺める。開戦は午前九時より。

この大きな川の下流にある中洲。潮が満ちていたり、雨の日には姿を消してしまうが、今日は天気もよい。

ここが主な戦いの場所だ。

もう少し下った先にある海からは冷たい風が吹いてくる。

私達を気にすることはなく、風は気ままに戯れた。

緊張が段々と高まる中、私は考え事に集中していた。

戦いの前には毎回、こうして思案にふける。

何故ならば、私がいまいる環境が異常だからだ。私自身、どうしてこのようなことをしているのかわからなかった。

そうして、何故が対立する存在があり、戦っている。

願い事などなく、最もな理由もない。

常軌を逸した世界で、疑問を抱き、理由もなく他者を排斥する行為をしていた。

私が元いた所は違う。

だからここがおかしくてたまらない。

時計が九時を示す。

場の空気が変わり、風以外の音が生まれた。

殺気を感じてとっさに右へ飛ぶ。

視線を移し、元いた地を見ると、そこは深く抉れていた。

少し上に目をやれば、そこに女性が立っていた。その者の手には大きな剣が握られていた。

きつとそれで力任せに地を叩いたのだろう。

避けなければえぐり取られていたは自身だ。そう思うと嫌な汗が止まらない。

体勢を直し、距離をとろうとするも、剣を正面に構えてこちらに突進してくる相手。

距離は一向に縮まない。

剣撃をかわしつつ、左手を上げる。剣の重量のためか一撃のスピードは対したことがない。

近寄られなければ危険はないとみていい。

手を上げるのは合図である。

近くに潜ましていた、光一に指示を飛ばすと、刹那、敵の動きが止まる。

「流石は光一、外さないね」

関心と畏敬の念を込めて光一がいるほうを一度みた。

「くっ……」

視線を戻す。苦悶の表情を浮かべて、大剣を地面に突き立てる。片膝をつき、辛うじて倒れないように踏ん張っていた。

彼女は確か、有沢さんだったろうか。顔には見覚えがある。

足の腱を撃ち抜かれて動きの止まっている有沢さんへ近づき、首に腕を回す。

「なにを」

腕に力をこめて、有沢さんを絞め落とした。

### 常日頃3

「由紀、一人撃破。一旦引く」

短く伝えて通話を切った。いまのところ、他に敵影はない。こちらを警戒してのことだろう。

今回の作戦において私は光一とツーマンセルで動くことになっている。

横文字に疎いくせに、銃器の扱いがプロフェッショナルであるパートナーはとても心強かった。

こちらからは姿が見えないが、光一が潜んでいる方向に一度、手を降る。

退却の合図だ。

私の指揮する前衛は、総勢六人。

バディシステムを原則とし、状況によっては単独や二人以上での行動もありとしている。

光一とは別々に自陣へ急いだ。

「ま、まってください！！」

高い声に振り返ると、そこに現れたのはセーラー服を来た少女。

俯き加減に顔を伏せ、胸の前で指先をもじもじと絡ませた。更に伏せた顔は赤く、チラチラとこちらを見てくるのだ。

肩口あたりで切りそろえられた髪は、鬱陶しさのない、爽やかな印象を持てる。

華奢な体つきは女の子らしさをより際立たせ、場合が場合ならば期待をしたことだろう。

しかし、そんな甘い期待を持つことはもちろんない。

「た、たわしがお相手致します!!」

一大決心をしたかのような顔つきで、私を鋭く見据え、言い放った。

ただし、一人称を大きく間違えていたのだから台無しだ。「えー」

リアクションをとれず、しばらく互いに固まっていたのだが、口火を切ったのは私だった。

少女は、恥ずかしさからか、更に顔を赤らめ、身じろぎ一つしない。

「たわしがお相手致します」

恥ずかしさがピークに達したのか、開き直ったようだ。

笑いが込み上げてきたが、失礼千万なのでこらえた。

「なまえ……ぶふ……きいて……くくっ……いいか？」

全くこらえられなかった。

心の中で笑ったことを謝罪しつつ、状況を確認する。

他に敵が潜んでいる可能性を疑い、周りに気を配るが、当然それだけではわからない。

救いと言えば、場が開けているので、隠れる場所が限定されるので対策は立てやすい。

少女は武装などしておらず、手を推測するのも難しい。

「さとねです」

そう答えて、こちらに一礼した後、何事が呟いた。

すると、一瞬まばゆい輝きが彼女を包んだかと思うと、光が消えた時にはさっきまでとは違う服装になっていた。

セーラー服はセーラー服なのだが、漆黒のマント、そして漆黒の帽子（とんがり帽子というのだろうか？）をかぶっていた。

その様は、お伽話や伝奇物で伝え聞く魔法使いの姿。RPG世界での魔法使い、と形容したほうがしっくりくるだろうか。

「さとねさん、ね。よろしく。私は麻村玲という」

自己紹介もそれなりに、さとねさんは先程とは打って変わって落ち着いていた。

怜悯な表情を浮かべ、まるで凧いだ水面のような静けさだ。

「玲様、お覚悟を」

「ははっ……お手柔らかに」

#### 常日頃 4

魔法使いのイメージは、単体では弱いといった感じだった。

特性や戦い方が不明な以上、油断は禁物だとわかっていたが、先手を取ればいけると踏んだ。

結果、先入観など充てにならず、浅慮な行動は身を滅ぼすと思い知られることとなった。

左腕からは大量に血が滲み、応急処置に巻いた服の切れ端も真っ赤に染まりつつある。

「ふう……」

大きく息を吸い込み、さとねさんは目を閉じた。

詠唱だ。

話に聞く通り、例に漏れず魔法を行使すれの中には呪文が必要らしい。

「神代の槍。罪深き人々はその槍で神を射殺した。滴る血は人を呪い、人より空を奪う。

地に縛られた人間は空を目指す。再び槍を手にとり」

歌うように言葉を紡ぐ。

美しい旋律が終わるとともに、その手には細長い槍が出現した。

可愛らしい少女には不似合いなそれは、長い棒の先端にナイフを巻

きつただけのような、非常にシンプルな物だった。

柄は黒く、夜の闇を思わせる。

鈍く光る刃が私を映し出しているのが、なぜだかとても不気味だ。

「左腕、痛みますか？」

「すごく」

「あなたの話はリーダーから聞いていましたが、正直いって拍子抜けです。」

「すぐ頭が切れて、冷静で、狡猾で、とても強い。」

「故に残念です。そもそも不用意に敵に近づくのは愚行です」

左腕に目を落とす。正体はわからなかったが、さとねさんに近づいた瞬間に、見えない何かに二の腕辺りを切り裂かれた。

「正体もわからないため、先以上近づくのは不可能だ。」

## 常日頃5

ここは逃げるのが得策か。

しかし、そう簡単に逃がすとは考え辛い。

さとねさんとの距離はおよそ五メートル。簡単に詰められてしまう。

迷っている暇はない。ここは逃げよう。

「逃がしませんよ」

牽制されるが、気にせず走り出す。

遠回りになるが、致し方ない。

「戒めよう。戒めよう。傲りし者を。磔よう。罪人を。

逃げ出すことはならず。

裁きを受け入れよ」

歌う。

響く。

朗々と、美しく。

そして、私は逃げられなかった。

頭が、逃げる選択肢を奪う。体に動く指示を出していない。

「不思議な感覚でしょう？ あるのは分かるのに、壁一枚隔てたような違和感。もどかしいでしょう。なにかに制約されるのは」

なるほど。魔法か。

その万能さに感心してしまう。

「ひとつ聞きたい」

「何でしょう」

「魔法とは、学問か？」

「……可笑しい質問ですね。どうしてそのような話を？」

「興味本位さ。学べるなら学んでみたい」

「ふふ。そうですね、学問ですよ」

「ほう。ご教授願いたいね」

「機会があれば。さて、そろそろ無駄話は止めましょうか」

跳ぶ。

さとねさんは一瞬で五メートルもの距離を詰め、私に槍が届くぎりぎりの距離で真横に薙いだ。

半歩後ろに下がってその一撃をかわすが、さとねさんは手中で、槍

を回転させて、再び刃が私を捉えた。

突き。

力強い踏み込みとともに繰り出された槍が、真っ直ぐに私を貫かんと迫った。

「なっ…」

槍を膝で下から打ち上げ、上向きにそれた槍を右手で止めてみせた。槍を掴んだまま、屈み込み、片足を軸にしてコンパスのように足を回す。さとねさんの足を払い、地に押し倒した。

「くっ…」

動けないようにマウントをとった。女性の力では力任せに払いのけるのは難しいだろう。

じたばたとしていたが、すぐに諦めておとなしくなった。

また暴れられても面倒である。

このままサブミションで体力を削ぐと考えた矢先、

「我は力の空蝉なり。脆弱は悪なり。故に虚構の力を行使する」

私の体がもの凄い力で弾き飛ばされる。空中で体勢を立て直し、足から着地するも勢いは殺しきれず、無様によりけてしまう。

「魔法つてのは万能だな」

「いえいえ、そんなこともないですよ？」

一言ずつ言葉を交わすと、互いに距離を詰めた。

槍が自在に私を捉えんと躍る。

槍術の腕はかなりのものだった。

突き。薙ぎ。突き。と、凄まじい連撃が私を間合いの内側に寄せ付けない。

薙ぎの動作で生じる僅かな隙を最小に抑えているのがポイントだ。単調ながらも攻略のポイントを見だし難い。

「我は力の空蝉」

瞬間、切っ先が肌を掠める。

「罪人、死を恐れる。苦痛に支配され、誇りを失おう」

「……っ!!」

右足に激痛が走る。槍で切り裂かれた部位だ。

さとねさんはそんなこと知るよしもなく、猛攻を緩めない。

痛む。

じくじく、と。傷口を絶え間なく抉られるような痛み。

「くっ……」

力を増幅して速度を上げたのか。

「恐れ、痛みにも果てよ」

「っがあー!!」

傷口に、焼き箸を突っ込まれたかのような痛みが走る。堪えきれず、地に膝をついてしまった。

さとねさんが槍を振りかぶる。数秒後には私を貫いているだろう。

「また、会いましょう」

無情に振り下ろされる。

間もなく訪れる運命に目を瞑り、身を縮ませた。

「Resist」

痛みが消える。動く。

間一髪、身をかわした。

「Last...boost」玲

力が漲る。立ち上がり、驚愕に戸惑うさとねさんの腹に膝を打ち込

んだ。

吹き飛ばさとなさん。

二度、三度、地面転がって止まる。

立ち上がる気配はない。

近づいてみると呼吸はある。気絶しているだけのようだ。

「にはは〜」

振り返る。激闘の後には似合わない、能天気な笑いを浮かべる人物がそこにいた。

「お疲れ様です、玲先輩」

## 常日頃6

「遅いお着きで」

「さーせん、そこでDQNにからまれてまして」

「どきゅ……なに？」

「敵と遭遇して戦ってますた」

「そうか……ところで時田、おまえも魔法使いなのか？」

「え？ 知らなかったんすか？ 前に全員の前で披露したはずなんです……」

「すまない。絶対見てなかった。絶対に」

「大切なことなので二回……先輩、もしかして俺のこときらいすか？」

「いやいや」

さとねさんと本格的にやり合う前に、携帯から増援を要請しておいた。

なかなか来ないものだから諦めかけていたが、ヒーローよろしく遅れてやってきた。

結果的に助けられたので「ありがとう」と礼は言うておく。

割と嬉しそうに「はい」と答え、こちらに近づいてくると肩から提げていたバッグを漁り、何かを取り出だそうとした。

「ありや……」

時田の左胸から盛大に血が飛び散る。

「あ、まいですよ」

「時田！！」

時田は片目を閉じ、苦痛に顔を歪めた。

ゆっくりと時田を貫いた槍が引き抜かれる。

同時に私は揺らぐ時田を支えた。

「時田！！　しっかりしろ！！」

「いや意識ははっきりしてますよ」

逆にこんな状態で流暢に話をしてほしくなかったが、痛みに耐える姿をみて突っ込みたい気持ちを抑えた。

左胸からおびただしい量の血が溢れ出てきた。

流れる血は時田の服を汚し、私の服を赤く染めてから、地面に吸い込まれる。

「先輩、これ」

その手には、大きなサバイバルナイフが握られていた。  
意味を理解し、受け取る。

「魔法は詠唱を封じればおけ、です。」

「は？」

「帰っ、たら教、えますか、ら……じゃ」

そう言うのと目を閉じた。時田を静かに降ろし、立ち上がるさとねさんを待った。

「いくぞ」

立ち上がったのを確認すると、呟いてから走る。

槍を構え、私を迎え撃つさとねさん。

薙ぐ。

左からきた槍を逆手に持ったナイフで受け、間髪入れずに右足でさとねさんの脇腹を蹴る。

槍を掴んで引き寄せ、吹き飛ばすことを許さず、肘で胸の中央を打ち、そのまま裏拳を顔面に食らわせる。

仰け反るも、私の連撃に耐えたさとねさんは詠唱を始めた。

「させるか」

砂を拾って投げつけると、やむなく詠唱を中断し距離をとろうと下がる。

好機。から空きの正面にナイフを投擲した。

「……あっ」

さとねさんの口から血が零れる。

胸に深々と刺さるナイフが、彼女を討つたことを証明した。

駆け寄り、時田と同じく倒れる体を支えた。

「甘いですよ……彼のように、やられてしまいますよ」

腕の中で力なくいう彼女は時田のほうをみて呟く。

「生憎と、人間の限界には詳しくてな。喋ると辛いだろ、静かにしとけ」

助ける気もないし、助からない。

しかし、戦った相手に礼儀を持つのがポリシーだ。

勝手ではあるが、果てる瞬間を看取るもそのうち。

「結局、全ての技をお見せできませんでした。久々によい戦いでした」

「……喋んなって」

「またすぐ会えますよ。そのときは全力で」

「技を出す隙も与えねーよ」

「ふふ、相手への気遣いは、情けにとられますよ?」

そう言って、さとねさんは事切れた。

## プロローグ2

鍵を開く。

自分の研究室だ。

机の上の紙束を手取る。

散らかった中、そこだけは綺麗に整頓してあった。

種類別にファイリングされているそれらから必要な書類を抜き取り、振ってある番号順に左から並べた。

一年程前のことである。

私はこれらを学会に提出した。

名声や金を手に入れたかったわけではなく、科学の発展を願い、一科学者としてこの論文をまとめ上げた。

結局は否定され認められることはなかった。

かといって、他の学者達を無能だなんだと蔑むつもりもない。

この世界では意見を通せないのが悪いからだ。

「さて、やりますか」

自分を鼓舞するように声を出す。

「前書きはいいから……この辺りかな？」

細かな字が羅列されている紙に目を走らせ、黙読する。

『既存の特定元素に、ある特殊な操作を加えることによって、地球上では安定しえない構造の物質を安定した状態で作り出すことができる。』

これだけでならば、科学分野における例外の一例として数えることも可能であるが、この操作を経て生み出された物質の核を破壊した時に完全に物質が消失してしまうという性質があることがわかった。』

『消失というのは形を変えて別のものになるという意味ではなく、この世界から完全になくなるということであり、多量のエネルギー放出と共に無くなってしまう。』

さて、これがどうして他世界性物質であるのか。これだけではそのようなことは言えないが、消えてしまった元の物質の代わりに別の物がこの世界に現れるというのがこの意味となる。』

『例えば、炭素を金の原子に変えることはできない。元の物質が炭素の塊だとすると、そして核を破壊し、一度消失させると金の塊にかえることができる。』

大発見ではあるが異世界を証明するには値しない。これだけではないのだ。』

『普通、化学的变化は直後に現れるが、これはそうではない。自然の作用であろう、無くなってしまった物質を世界自体が穴埋めしようとして百から百一に増えてしまった別の世界から、九十九になったこの世界が一を引っ張る働きをもつ。』

物質が消失して二十四時間が経過した瞬間、別の物質が現れる。大きさや種類に依存せず、きっかりと一日が経過することで元の場所に別のものが現れる。』

## 常日頃7

「ばっきやるー!!」

由紀は一度私から離れると、走ってこちらに近づいてくる。

何をするのかと思いきや、

「ぎゃーす」

私にドロップキックをお見舞いしたのだった。

「増援を駄目にして自分だけでもどつてくるとは何事か！」

何も言いかえすことはできない。あれは私の落ち度であり、他の前衛に指示を出すことも忘れていた。

「すまない……なんとか巻き返す」

「意気込みやよし。でも違うの、あなたもわかってるでしょ」

「仲間を疎かにするものの上で指示する資格なし」

「何があったかは聞かないわ。時田にも落ち度はあったはず。でも、前衛のリーダーであるあなたが冷静さを欠いた結果よ」

「ああ……」

「由紀さん」

通信担当の雪代さんが何かを伝えると、由紀は急いで講堂から出て行く。雪代さんが後に続いた。

携帯を取り出し、素早くメールを作成し、一斉送信。

左腕の傷ちゃんと処置してから包帯を巻く。血は止まっていたがきつめに縛っておいた。

「あれ、玲さん」

「雪代さん」

気づけば、いつの間にか雪代さんが目の前に立っていた。

「どうなさったんですか？」

「なんでもないよ、少し呆けてた」

「嘘が下手ですね。包帯、不格好ですよ？」

「君も人が悪い」

くすくす笑いながら私の左腕に手をかけ、優しく包帯をほどくと救急箱に手を伸ばした。

「……玲さん、傷口は洗いましょうね」

「……どこから取り出した」

雪代さんの手には一升瓶。日本酒のようだ。

蓋をとると逆さに傾けた。

「いだだだ、痛い痛い痛いから」

勢いよく酒で傷口をすすがれた。ひりひりという痛みが絶え間なく続く。

「我慢しましょうね」

相変わらずニコニコと笑いながら酒を注ぎ続ける雪代さん。

やっと終わったかと思うと次はタオルで強く傷口の水気をふき取り、薬をつけ、包帯を巻かれた。

「はい、治療完了です。玲さん、お体は大切になさって下さい」

「いいだろ？ 次にはどうせ全部治ってるんだ」

「そういう問題じゃありません」

続けて「いいですか？」と切り出し、菌が入ったらどうだの、戦いに支障がでるだの言うが結局、締めには、

「皆さんが怪我してるのを見るのが嫌なんです」

と言った。

優しい。世話焼きな性格が窺えた。

私は「わかった、気をつけるよ」と言い、立ち上がる。

「そうだ、玲さん!」

「なんだい?」

「今度、稽古つけてくださいよ!」

「君が? うむ、わかった。一段落したらな」

「はい!」

元気な返事はとても気持ちよかった。

雪代さんを背中に講堂を後にすると、由紀がいた。

講堂の脇にあるベンチで足をぶらぶらさせながら、手持ち無沙汰と  
いった様子だ。

「青春しくさってからに」

「誰が青春か」

「そんなあなたに朗報です。今回はドローとなりました」

「なに?」

「ドローよ。ドロー。引き分け」

「どうして？」

「あちらからの申し出よ。今回のゲームなしにしてくれって」

「受け入れたのか。これまたどうして」

「不利だったからよ。前衛はぐだぐだ、後衛との連携もうまくできてない。

こんな状態で続けたいの？」

「ぐぬ」

もつともである。しかし、不可解な点はどうして中止を提案してきたかである。

「いつものあれよ」

そんな私の考えを見透かしたように言う。

「ああ、飽きたのか」

「ええ……いい加減よね……」

戦いはリーダー同士の協議により決められ、ルールもそのときに決められる。

基本ルールは教えられるが、特殊なルールがあると教えられないことがあるらしい。

しかし、今までに十数回争った中でそんな特殊ルールが適応された

ことはない。

後、リーダーは互いに調停権とルールを一つ追加する権利を持つと聞いた。

とはいっても調停に関しては間に誰かが入るわけではないので、調停というのは怪しいか。

結局はリーダー達の協議による独断だ。

「なんだかんだで、今のところ十三戦、二勝二敗。私たちも情弱ね」

「そないなこといいなさんな、由紀」

出るのは溜め息ばかりである。

同時に、また訪れる平穏に嬉しさを感じたりしながら。

## 特になにもない日々

目覚める。

起床時間は決まって六時だ。

意識せずともこの時間には目が覚める。習慣というやつだ。

ジャージに着替えて外に出た。

寒いな、と思えば霜が降りていた。

軽くストレッチをしてから走り出す。毎朝のランニングも習慣だった。

しばらく走って、体も程よく温まってきたころ、後ろから足音が聞こえてきた。

「由紀か。おはよう」

「おはよう、玲。毎日ご苦労ね」

お互い様だと思う。ランニング仲間である彼女とは毎回、この辺りで会う。ということは由紀も毎日走っているわけだ。

「走りだす時間はあわせてもいいよな……家隣だし」

「こっちはこっちの朝の過ごし方があるの」

「そうかい。そうかい。じゃあ晩飯時に来たり、朝の四時頃に家に忍び込んだりするの止めてくれ」

「さあ玲、すこしペースあげるわよ」

「何なんだ……」

悪戯を仕掛けていたかと思うと、うちの台所を勝手に拝借して朝飯を作ってくれていたりと意味がわからない。

先日話であるが、扉をピッキングでこじ開けやがるので合鍵をくれてやったという話もある。

「由紀、朝飯くったか？」

本当にペースを上げた由紀の後を追いながら訊ねる。

「まだよ。どうかした？」

「ああ、ご馳走してやろうかと」

「Oh...really?」

「リアリーリアリー」

「じゃあ、いつもより多く走ってくるわ!」

しゅた、っと手を上げて走り去る。

「あんまし走りすぎもよくな……って聞いてないですね」

食事の準備もあるのでこころで引き返すことにしよう。

家の門が見えた辺りで人がいることに気づく。

「おや、光一。おはよう」

「アキラッタ!! おはよう!!!!」

エクスクラメーションマークがいくつもつきそうな勢いで挨拶をくれた光一。

家の前にいるのだから私に用事でもあるのだろうか。

「して、どうした」

「飯くわせて!!!!」

「……話を聞こうじゃないか」

「お腹空いた!!」

「………わかった、しばらくかかるからな？」

「わーい」

門を開けて光一を敷地に通す。

弾丸のようなスピードで玄関までたどり着いた光一は勝手知ったる我が家という感じで扉に手を掛ける。

鍵閉めていたはずの玄関が開いたことはさておき、私も中に入り、門を閉めようと、ふと外を見れば遠くにまた人影をみつける。

由紀だろうか、随分と早い。

手を振ろうとした瞬間、昨夜のことが頭をよぎった。

「雪代……さん、か」

昨日の夜、メールで雪代さんとやりとりしたのを思い出す。内容はというと。

From:雪代『こんばんは。お時間大丈夫でしょうか？ その、前にお話した稽古の件なのですが、明日はお暇でしょうか？』

To:雪代『こんばんは。うん、大丈夫だよ。都合のいい時間にきてよ、明日はずっと家にいるから』

From:雪代『では、朝からお訪ねしていいですか？ えと、気合い満々です!!』

To:雪代『教えがいがありそうだね。なんなら朝ご飯はうちで食べないかい？ 二人も一人もあんまし手間は変わらないし』

From:雪代『え!？ そんな、悪いですよ……食事はとってきますし、昼も持参します!!』

To:雪代『まあまあ、私は料理が好きなんだよ。遠慮せずに食べてはくれないかい？

恥ずかしながら他人に食べさせたことがなくてね。実験みたいで悪いけど感想を聞いてみたくて』

From:雪代『あわわ、私なんかでよければ!! じゃあ朝早く

にお邪魔します！！  
お休みなさい！！」

TO：雪代「お休み」

「オーマイゴッド」

四人分作るとなると材料が足りないかもしれない。

「まあなんとかなるか」

手を降るとふりかえしてくれた。門を開けたままにしておき、家へ入った。

## 特になにもない日々1

「Why? なんであんだ達がいるの?」

ランニングから帰ってきた由紀は、状況が掴めませんとばかりに目をぱちくりさせた。

「ユキリンじゃあ、ありませんか。おはし!!!!!!!!!!」

「由紀さん、おはようございます」

和やかに挨拶を交わしているとこ悪いのだが、食事はもうできている。

配膳くらいは手伝わってもらっても罰は当たるまい。

「並べんの手伝えや」

雪代さんが慌てて皿を受け取る。

うむ、いい子だ。

「お前らときたら……」

光一が由紀に関節技をかけられていた。

「むり!!!!!! 俺の関節崩壊するって」

「じゃかしい」

通路で遊んでいたので、まとめて蹴り飛ばすも、由紀は光一を盾に蹴りを防ぐ。

運悪く鳩尾にダイレクトしてしまい、死にかけのゴキブリのように、床をのた打ち回りながら悶絶した。動きがきもちわるい。

「お前……ひどいな」

「蹴りをかました奴の台詞ではないわね……」

「私は床にある障害物をどかそうと足を使ったに過ぎない」

「うん」

「ふむ」

「「飯にしよう」」

二人揃って言うと、居間にある食卓についた。

「大丈夫ですか？」

「ソララあ……」

凄く嬉しそうな顔をしていた。救われたっていうのはああいった様子だろうか。

雪代さんは屈み込んで光一を心配そうにみつめる。

ふと疑問が浮かんだ。

「ソララって雪代さんのことか光ー？ お前はへ……奇抜な呼び名をつけるよな」

「ノリと印象とお告げで決めてるんだ」

「なんだよお告げって」

「頂きます！！！！」

「はい！？」

「あはは、では私も頂きます」

きよとんとしていた雪代さんも、一度はにから座る。「どうぞ」というと手をつけはじめた。他の二人は言うまでもなく既に食べ始めていた。

「「おかわり」」

「遠慮ないな、ま、そのほうが嬉しいんだけど」

メニューは純和食といった感じ。鰯の干物に味噌汁、昨夜の晩御飯に大量に作った肉じゃが。

緑が少ないので、きゅうりを千切りにして塩でもんだもの、後は銀しゃり。付け合わせにふりかけ、納豆、のり、いろいろ用意してみた。

「……」

「……」

「……」

無言。ご飯以外に手を着けた皆が押し黙る。

まずかったのだろうか、割と料理には自信があつたのになににも感想がないとなると自信をなくす。

ドキドキと三人を伺う。

最初に言葉を発したのは光一。

「うおお……」

しかし、言葉らしい言葉ではなかった。口から漏れたという感じだろうか。

さらには涙を流している。箸を握りしめながらだ。非常にシユールである。

「お、美味しいです!」

「これは、これは……うますぎるだろ」

「うぐ……ダメ出ししようと思ってたのに、これは……」

「ありがとう。しかし、腕が試されるのは肉じゃがくらいじゃないか?」

「魚の焼き加減みたって、ちがうよ」

「そっか」

とても嬉しかった。人から「おいしい」と言って貰えるのがこんな  
に心地いいものだとは。

「……お代わりまだあるからな」

口元がにやついてるのが自分でわかった。

見られるとツッコまれそうなので皆にそっばを向いていう。

がつがつがつ

気にする必要もなかった。飯に集中してこちらなどみていない。

「……ったく」

そんな三人をニコニコみる俺はきつと気持ち悪いだろう。

しばらくして、皆が食べ終え「ごちそうさま」と一段落。

「食後の運動と行きますか」

由紀が言う。

「じゃ、また走ってくるから。夜でも遊びましょ!」

腕を上げてから退室する。

たらふく食べた光一は寝ていた。

「ふう」

緑茶を啜りながら、やっと静かになった居間を見渡す。  
そういえば最近、隅々まで家の掃除を行っていない。午後からやっ  
てしまおうか。

「……………ん」

そう思い至ると、とことんやってしまいたい。  
今日は天気もいい、蔵の中の物を虫干しするには丁度よい。

「……………らさん」

屋根瓦の塗り直しもしないといけない

「あきらさん!!」

「はい!?!」

肩を揺すらて初めて気づく。

雪代さんは不満そうに眉根を寄せて私の顔を見ていた。

「むう……………」

「あた」

中指で額を弾かれた。

デコピン?

「あきらさん、さつきから無視して……ひどいです」

「へ？ ああ、すまない。考え事をしていてな」

「あきらさん、今日は稽古つけてくれるんですよね？」

「……………おお」

飯の事で頭がいつぱいで忘れていた。

「あきらさん？」

何だか声色が違う。怒気を孕んだ調子で言う彼女がとても恐ろしい。

「まさか、わすれ」

「てるわけないじゃないか、何をするか考えていたんだよ。いやだなあ、雪代さんは疑り深いなアハハハ」

言葉を途中で遮って取り繕うも、苦しい。

ジト目で見られ、観念する。「ごめんなさい」と謝ると、ふにゃつと表情が崩れて、

「よろしい」

と言って許してくれた。

「じゃ、外でようかね」

「はい!」

立ち上がりながら、由紀が戻ってきたら少しお手伝いをしてもらおうと思った。

## 特になにもない日々2

「ちなみに、武術の経験は？」

「一応、あります」

「じゃあやめといたほうがいいかもよ？」

「どうしてですか？」

「私は、綺麗な型だとか、こういう風にやるんだ。とか教えることはできない。実際に……んと、相手を倒しやすい？　というか、そういうものだから」

私の武術は完璧に我流だ。古今東西あらゆる武術を研究し、独自に組み上げたもの。

伝統もなにもあつたものではない。

なんというか、完成度では一介の武術に負けてはいないと自負しているが、如何せん、卑怯なのだ。

そして、色々な技を使えることが必ずしもアドバンテージになるとは限らない。

時田も組み手ができる位に体術を使うので、相手をしてもらっていた時に言われた台詞が、

「天才が厨二病をこじらせるとこんな風になるのか……」

厨二病とは何かと尋ねたところ「若気の至りつすよ……」と答えていた。

いやはやまったくその通りである。漫画の中でなければこんなもの使う機会すらないというのに。それでも必死に基礎を磨き、技や型を研究し、作り上げた。

新しく創造される流派は少なくない。それでも、それが大衆に浸透しないのは、それらの伝統的武術がどれほどに完成されたものかを暗示している。

「空手、少林拳、ボクシング、テコンドー、ムエタイ、素手で行う格闘技だけを上げててもきりがなく、その全てに歴史がある。東洋武術は美しく、西洋武術はダイナミックなものが多い」

「つまりどうということですか？」

どうして私は知識をひけらかしているのだろうか。言いたいのはそういうことではない。

「殴り合い用の格闘技だけどいいのかい？」

武道を志す者には概ね二者ある。

心身を鍛えたい者、ただ強くなろうとする者。

後者には大成はないのかもしれない。

「私は君に精神を説くことはできない。心身相関という言葉を体現しようとするならば、王道を知るのが一番だ」

「わたしは……あきらさんに教えてもらいたいです。こんなこと言ったらいけないかもしれませんが、楽しく習いたいんです、武術」  
なんとなく、ドキリとした。その好意が私にむけられているようで。

「はは……楽しく、か」

「はい！ あきらさんは難しく考え過ぎるんです」

「性分だね、直そうとは思ってるけど。うん、ありがとう」

雪代さんは、はにかむ。

可愛い顔立ちには笑顔がよく映えた。

「組み手できるかな？」

「はい！」

「構えて」

力や熟練度を測る意味でも組み手は重要だ。

適度に体を温め、ポテンシャルを引き出すにはうってつけである。

半身に構える私に対し、正面のまま自然体で腕を上げる。

ボクシングに近い構えだ。但し、腕の位置は若干低めだった。

「よし、来てくれ」

雪代さんは頷くと、体を落として駆け出す。

間合いに入った途端に蹴りがきた。

体を捻りながらの回し蹴り。空中で一回転して右足を繰り出す。

なかなか鋭い。

しかし。

「柔軟性、二重丸。筋力、三角。スピード、丸」

ひらりと蹴りをかわして、着地点でつんのめる雪代さんの片手を掴む。

「いい素材だ」

「あわ……」

「ほんじゃ、ま、由紀が帰ってくるまで休憩」

「え?!」

「相手がいないと……私はそういった相手には向かないからな、それに比べて由紀は素晴らしい」

「そんなあ」

何だかしょんぼりしている。しかし、これは納得してもらわなければならぬ。

「なんだか冷たいです……今日だってあきらさんと二人きりだと思  
つてたのに」

「光一は不可抗力だったんだ」

「え？ 私しゃべってました？」

「すまない。あの二人にご飯をごっそり持っていかれたからな、昼  
飯は任せておけ、たくさん作るから」

「あははあ……なんだか解釈が自然に不自然ですね……あきらさん  
らしい」

「材料を補充しとかないとな」

「聞いてないですし」

雪代さんがなんだか泣いていた。  
私といて楽しいのだろうか？

「買い出し、というのもおかしいが、付き合ってくれないか？」

「はい」

連れ立って家を後にした。向かう先は無人の商店街である。

家からはさほど離れておらず、十分もすれば着いた。

ようこそ冬桜商店街へ。とかかれたアーケードを抜ける。人の気配  
はない。

「全くもって泥棒のような気分だよ」

商店街には店が立ち並んでいる。かなり規模は大きく、食料品から日用品、ファッション店やら果ては家具がある店もある。

「七不思議ですね！」

無人。しかし、店内にはBGMがかかっていたり、魚屋では新鮮な魚がざるの上で跳ねていたりと現実離れた光景だ。

そもそも、私達は二十人しかこの世界にいないはずなのに、水道、電気、ガス、インターネット、携帯と、全てが機能している。もちろん、管理している人間などいないし、金を払う必要もない。

店の商品を全て取り払っても、次の日には違う物が並ぶ。

品物が入れ替わる様を見ようにも、なぜか夜中は全ての店に『入れない』。

私が元いた世界とは似て非なる世界。

まるで誰かの意思があるようで気味が悪い。

生物を観察するとき、人工的にそのものが生活する環境を再現させることがある。死なないように食べ物を用意してやり、といった感じだ。

自意識過剰だろうか、いや、正直な話、この世界がなんであるかをさぐることはできない。

そういった設備もないし、世界についての定義が定かでない世界からきた私には到底理解し得ないだろう。

「もー！！ あきらさん！」

気づけば雪代さんが目の前にいた。両手を広げて私の行く手を阻んでいた。

「どうしたの？」

「どうしたの？　じゃあ、ありません！　また、考え事してるでしょうー！」

「ああ、すこしな。悪い」

「あきらさん、私のこと嫌いなんですか？！　家出から一言もしやべってませんよね」

「あれ、そうだった？」

「私、勇気出してあきらさんを誘って、うぐ、いえ、とは言っ  
ぐす、もそういう間柄ではなく、ただ稽古を、でも……ふえ、  
うぐ」

目尻に涙が浮かべ、私に何かを言う。涙声でなにを言っているのかよくわからなかった。

「え、あの、ごめん！　ごめんね！　泣かないで！」

このような場面でどうすればいいのかよくわからない。  
理由はよくわからないが、私に落ち度があるようだ。

もしや、好き勝手に予定を変えて、挙句、買い物？　に付き合わせ

たことを怒っているのだろうか。雪代さんは人がいいので断ることもしないだろう。

「ごめんね、雪代さんのこと考えずにこっちのことばかりしちゃって、怒らないで、いや泣かないで！ とにかく機嫌直して！」

「あきらさんのばかりー！！」

そう残し、彼女は駆け出して行った。

「雪代さん！！」

特になにもない日々3

あれから二日経つ。

雪代さんからは音沙汰がない。フォローのメールを入れたが、理由もわからず謝っても納得してはくれまい。

人と関係が悪くなるのは嫌だ。

しかし、どのように振る舞おうと争いはおこる。相手が納得しなければ、私が納得できないのだ。

「……っ」

目覚めはいつも六時だ。眠い。

だらだらと無駄に悩むのは学者の性かもしれない。

この二日間はあまり寝ていない。

布団から体を出すと、冷たい空気が体を震わせた。いつもよりも冷える。

カーテンを少し捲り、窓の外をみると、一面真っ白だった。

「雪か」

思わず、言葉が漏れた。物珍しいものには興味をひかれる。大人げなく、雪に気分が高揚するのを感じた。

視界を部屋へ戻すと、携帯が点滅していた。

折りたたみ式の携帯、割と多機能なそれを私は気に入っている。  
フリップを開くと、画面の端に新着メール3件と表示されていた。

差出人は全て由紀だった。

From：由紀『雪だよ雪』

From：『起きなよ！ 雪合戦しましょ』

From：『雪だるまでけたー!!』

何だか可愛らしい。無邪気な内容に思わず顔が綻んだ。

外に出るため、洋服ダンスからロングコートを取り出す。マフラーと手袋、靴下も着てから玄関に手をかけた。

扉を開けようとして、ふと思いつく。

食料を補充したときに、小豆があったはずだ。ぜんざいを作っておこう。

ぜんざいを作ってから、外に出ると、由紀がいた。

「いやいやいやいや」

「玲、遅い」

「人の庭でひとり雪遊びってなあ」

「そい」

顔面に飛んできた雪玉を受け止める。

「石をいれるな石を」

砕いて中をみると本当に小さいが石が混じって「そい」

顔面に飛んできた雪玉を受け止める。

「石をいれるな石を」

砕いて中をみると本当に小さいが石が混じっていた。

「全く、当たったらどうすべら」

雪玉が顔面に当たったようだ。冷たい。

「うへーい」

「くら……くら」

雪を拭いながら由紀をたしなめる。

しかし、反省する様子はなく、続けざまに雪玉を投げてきた。

避けきれないものは裏拳でとらえて砕き、その場で避けれるものは体をくねらせて避けた。

「何球あんだよ！」

通算二百五十。いったいどれだけ暇だったのだ。

「あと二千二百よ」

「まだ十分の一も投げてないのかよ」

「かまくらつくりましょ!!」

「清々しいくらいガキの思考だな」

言いつつ、納屋へ向かい、スコップを取り出す。雪掻き用とかではないので使い勝手は悪いが、ないよりましだろう。

「全員呼んだわ!!」

「マジかよ、村上さんとかには迷惑かけるなよ」

「実はもう居るんだなこれが」

振り向くとそこには村上さんがいた。

こんなに寒いというのに、膝上までの短いスカート、カッターシャツの上にセーターを重ねた姿だった。

靴下は黒のニーソックス。

全体的に服がボロボロであるのはなぜだろう。

ふわふわした質感の金髪の髪は、腰辺りまで髪のある由紀よりもさ

らに長い、膝裏あたりまである。

縁のない眼鏡（本人曰わく視力はよい）をかけ、いつもヘッドフォンをつけている。

凜然とした顔立ちは少しきつめに見えるかもしれないが、間近で見ると可愛らしい。

すでに目を引く外見であるが、パツとみて一番最初に特徴的だと感じるのは、やはりその双眸だろう。

虹彩異常症。所謂、オッドアイ。左右で瞳の色が違う。片や、澄んだ冬の空のように碧く、片や、翡翠のように鮮やかな緑である。

猫に多く見られる虹彩異常症だが、それは遺伝的なもので、人の場合は病気や事故などにより後天的に虹彩の色が変わることが多い。

無口な上、スタイルが特出して個性的なため、仲間内からも近づき辛いと言われている。

だが本人はそれを気に揉んでいるようで、よく気づき、他人を気遣うが、なかなか報われない感じの心優しい人である。

機械全般のスペシャリストで、もっている工学的技能はもはや、私のいた世界のどの技術者をも凌ぐレベルだ。

驚くことに彼女は機械工学とひと括りできる全ての分野においてその知識を有するのだ。

科学分野全般に興味のある私は時々、教えてもらったり、研究や機

械の製作を手伝ったりするので仲がよい。

「村上さん。おはよう」

「おは……」

そう言つて、手を小さくあげて、ちょこちょこ振る。

「ふふふ」

突然、由紀が不敵に笑つたと思うと、家の門が開かれた。

## 時田の授業

哲学的な話だが、死んでも生き返るのなら殺しはいいのかという話だ。

勿論、このことは死ねば二度と蘇ることがないという現実を知っていてこそである。

人は認識できない概念へと考えは及びにくい。

それを認識できる形に置こうとするのが科学であるが、そもそも、死がないならこんなことを考える奴はいない。

死がない世界ではない。生き返れる世界だ。

死亡から二十四時間。その要因が怪我であれ病気であれ、完治して生き返る。

神秘の力……ではないという。私が来る前からこの世界にいた由紀。

「空気があるくらい自然なことよ」と言った。

例えば微妙だと思った。それも神秘だと思わなくもないから。

時間という概念を知ってる私達は始まり終わりにこだわって生きる。

始まりがわからない世界なのだから、神秘と呼んだほうが楽だ。

私は分野として確立していない不思議に興味はない。

空気があるように自然なことなら、気にする必要はないか。私にはわからない。

しかし、例え生き返るとしても、私は相手を傷つける、傷つけた。

故に、相手を排することに、エゴイズムを発揮するために、覚悟と責任をもとうと思う。

自分のルールだ。私の常識では、殺しは悪なのだから。

「……ああ」

「起きたか、時田」

意識がはつきりしないようだ。

さっきまで『死んでいた』時田は、目を擦りながらベッドから体を起こす。

「玲先輩、なにしてるんですか、人の家で」

「残念だが大学内の医療施設だ」

大学は多種多様な研究ができる。

経営しているのはある資産家だが（とはいってもこの世界ではない）、名のある研究者や、将来有望な研究には金にいとめをつけない。

そういえば、私がこちらに来たとき最初に驚いたのは、この世界が

私がいた世界とまんま同じだったことだ。

家の場所も表札も同じ、あちらからもつてきた鍵も使えた。

家にあるPC内のデータもごっそり同じであつた。

しかし、インターネットやテレビは情報が更新されることはない。

人がいないからだろう。もともとあつたページなどはあるし、検索エンジンも機能する。運営がないのに使用できるのは電気やガスなどと共通している。

社会のシステムを使用できるのは人間のみだ。人間が都合よく、使いやすい作っている。

機械は自身を管理できない。これは村上さんの言葉だ。

私には確信がある。必ず、この世界には管理者がいる。

「ああ……なんだ、俺、死んだのか」

まあ、それがどうした。という話ではあるが。

「すまない、俺が不甲斐ないばかりにな……」

「……そう、そうだ!!」

「悪い……」

「魔法!!」

「はい？」

「教えるっていったじゃないですか!!」

「……ええ？」

「運動場行きますよ！」

「まで……おい！ 引つ張るな、こけるから！」

というわけで、死に上がり？ の時田に連れられて外に来た。

「どこからもってきた」

ホワイトボードが何故かあった。

「では魔法の講義を始めます」

「聞いちゃいない」

「魔法は概念的知識形態を顕現します」

「なるほど、わかんないや」

「俺達は様々な要因によって世界自体から制約を受けます。重力にしる何にしる、能力に制限を掛けられます。勿論、脳がかけるリミッターをふくめて」

「はあ」

「知識形態といっても、文や図で表せるような確固たる形式があるわけではなく、感覚といったほうが近いです。まあ、そうはいつでも法則や決まりもありますが」

「存在する当たり前の世界のルールに、ありえないことが可能になるルールを書き加えるのが魔法です。それを可能にするのが魔力、そして、呪文」

「……なるほど」

「魔力はルールをねじ曲げる度合いにより変化します。極端な話、相手の存在を無かったことにすることも可能です。理論的な話ですが」

「無敵だな」

「そう、チートです。しかしながら弱点もあります。呪文ですね、はい」

「詠唱か」

「はい。そうですね。詠唱中は精神を集中して、世界に修正をかける式を構築します。

ただ中断されても続けて詠唱できますよ」

「じゃあやつぱ最強じゃないか？」

「それがそうでもないんですよ。極端に言えば相手の存在を無かったことについていいましたよね。詠唱……呪文には意味があります」

「……」

「魔力を世界の修正に使う燃料とすれば、呪文はラインです。そのルールを決定づけるためのパス。さとの奴の「力」の増幅、あれは俺ではできないですし、実際に言う単語に意味ありません」

「長ければ長いだけ修正をかけるときの管が大きくなる」

「御明察。自分内の知識形態から世界のルールを上書きするには、とうぜん、情報を多く送れるほうがいい。

送り出す魔力、大きければ大きいだけ、多ければ多いだけ、本流をねじ曲げるのは簡単です」

「だが、呪文に意味がないなら、戦いの時に同じ詠唱で違った術を使えばよくないか？」

「ごもつとも。しかし、です。言葉とは勝手に人間が創ったものですが、意味をもつと独立するんですよ」

「言葉自体も世界の縛りにはいると？」

「先輩あつたまいいー。言葉と術式をうまく組み合わせると、魔力の消耗が少なく、高速で詠唱できるわけですね。

対して、意味が異なるとどうでしょう、言葉の縛りを修正して、かつ違う術式、効率が悪いんですよ」

「なら、ある程度、呪文を聞けば術を予測できるのか。意外と難儀だな」

「いえいえ、それさえクリアしちやえば、奇跡を我が手にってね。  
幅広い応用が利きますよ」

聞けば聞くほど興味をそそられる。

#### 特になにもない日々4

次々と仲間が倒れていく中、残ったのは私と由紀、雪代さんだけであった。

強敵。その意味を噛み締め、揺らぐことのない相手へ、またひとつ、ふたつと、

雪玉を投げる。

「さて、いくらなんでも魔法は反則じゃないか？」

「あはははは」

「ときたああああ」

分厚い雪の壁は、魔法により超高速で打ち出される雪玉でいとも容易く崩される。

こちらから投げる雪玉は意味をなさない。なぜなら、すべて迎撃されるからだ。

「そら、雪玉を作って。玲、投げて。壁を修復するから私のところへきたのは弾いてね」

「無茶いな」

この雪合戦のルールは、腕、足以外の部位に三発くらったらアウト。拳や蹴りで雪玉を弾くことが許されている。

他、使えるものは使っていないが、ただし真ん中に線が引いてあり、それを越えて攻撃はなしだ。

しかし、手慣れたものだ。

由紀は一瞬、とまではいれないが、ものの数十秒で即席ながらも防壁を築きあげる。

スコップを巧みにつかい、高く、堅く仕上げる。

作っては入り、壊されてはまた作り、と防戦一方である。

五対五。

あちらはひとりも減っていないのに対して、こちらはもうすでに二人脱落しており、暖かい室内から私達を応援していた。

二人……村上さんと光一であるが、炬燵の天板にもたれかかり、ぐでーってくつろいでいる。

いい気なものだ。

「できました!!」

「オーケー。玲、行くわよ!!」

「任せろ!!」

由紀と雪代さんは両手に雪玉をもつと、私の後ろに移動する。

私は手の関節を曲げ、形をつくると掌底で壁を穿った。

私達を見ながら攻撃しなければならない時田は、壁の内側にはおらず、前で堂々と戦っていた。

自らの壁を壊しての奇襲。流石に驚いたのか、一瞬、たじろぐ。その隙を逃さず、後ろの二人が雪玉を時田にぶつけにかかる。

「しまった！」

胸、腹、肩、顔と四発続けて命中。

攻撃の要である時田を討てたのは大きい。砕けた雪壁の破片を集めて投げる。

当然、相手の壁を壊すほどの威力は出せない。

由紀と雪代さんは壁を作りにかかり、私は雪玉がこないよう援護にまわる。

たちまちに出来上がった防壁の裏に隠れる。

これからは普通の雪合戦。

「玲、右に避けなさい！！」

反射的に右に飛ぶ。

元いた所に大量の雪玉が降り注ぐ。

「あぶねー。よくわかったな」

壁で見えないだろうに。いや、上からだったらから見えたのだろう。

「それよりも……これ」

スコップを手渡される。何に使えばいいのだ。そう言う前に雪玉をのせられる。

納得し、勢いをつけてスコップを空に向けてスイングした。

「のわ」

「あや」

「へ？」

「油断大敵じゃの」

四者四様。やられてリアクションを示す。

緊迫した攻防は一変。同じ攻撃で裏をかいだ私達の勝利に終わる。

戦いはいつも呆気ない。

時田を失った城は容易く陥落した。

「はい。あんたたち、反省点をあげなさい」

「時田に頼り過ぎました」

「やる気のなさ」

「統率者がいない」

「そもそのポテンシャル」

「あんたたち……」

呆れる由紀の心情はわかる。わかっているのにしない彼らにやるせなさを感じる。

「足りないのは雪玉のストックよ……」

「えええ!？」

まだそれをプッシュするのか。

「さ、中に入りましょう。寒いわ」

「」「ういー」「」

そろそろ室内に入っていく。

私の家だという認識はあるのだろうか。

「あはは、あきらさんどんまいです」

「雪代さん」

体を動かしたからだろう、若干顔が赤い。

ニコニコと優しい笑いを浮かべ、私に励ましの言葉をかけてくれた。

「あきらさん、いつも由紀さんに振り回されてる感じです」

「全くな。それより中に入ろう、冷えるよ？」

「はい……」

雪代さんを促し、家へと向かう。たったの数メートルの距離。

その間、互いに押し黙っていた。

一歩分だけ先を歩く雪代さん。玄関までたどり着き微妙な空気のままに、二人ぼっちの空間が終わろうとしていた。

しかし、私は彼女に謝らなければいけないのだ。いまを逃すと完全にタイミングを失う。

「……あ、の、この前はごめん！」

「あきらさん？」

「その……気に障った理由もわからずに謝るのも無礼だが、うやむやにして、そのままというのはいけないと思う」

「あきらさん……」

「なんというか、ううん、ごめんなさい」

深々と頭を下げる。

無茶苦茶である。

許してほしい。嫌われたくない。

真意を察することができないで傷ついている相手に対して、とんだ非礼である。

まさに子供の理屈。

わかってないのにとりあえず謝る。  
胸にもやもやといやな感覚がした。

その違和感がとても不快である。

自身に苛立ちしか覚えない。

「だから、あきさんはおばかさんなんです」

「うむ……」

「謝ってばかりじゃ、男らしくありませんよ？ たまには甲斐性  
みせてくださいってんです」

「ははは、甲斐性なしってか」

「難しく考えないでください」

ふいに、目を細め。

優しく。

どこまでも優しい声色で。

雪代そら。

「自分じゃないんだから、相手のことなんて理解できません」

彼女は語る。

「勝手に分かったふりして、相手が望んだ言葉だけを探す、そんなの嫌です」

いつでも。

いや、たまにだけでも。

「歩みよろうとして、履き違えて、それでも、相手を思いやれる」

彼女は私に大切なことを教えてくれる。

「そういう心が、とっても暖かくて、愛しいんですから」

にこり。と。

すべての罪を許してしまいそんな微笑みを私に与えてくれた。

見惚れずにいられようか、いや不可能だった。

頬が熱くなり、心臓が大きく跳ねる。

彼女はいつもの表情にもどり、扉をあけて中に入っていつてしまっ

た。

寒い寒い中、ひとりぼっちになった。

それでも、この動悸や体温の上昇はしばらくおさまってくれそうにない。

## 時田の授業1

「して、なぜ外に来た？」

「そりゃもちろん、先輩に魔法使いになってもらおうかと」

「はい？」

魔法使いとはそんなに簡単になれるものなのか。

それはさておき、すんなりと異能の力の存在を受け入れている自分が不思議であつた。

元々、創作物が好きだったせいかも知れないが、これは世間で言う『現実と空想の区別がつかない人』ではないだろうか？

少しばかり悲しい。

「いまから、火の玉ぶつけるんで、『Resist』って言うってくださいね」

「は？ おい待て」

「I exercise the flame」

お構いなしに詠唱を始める。

時田の周りの空間が一瞬だけ揺らぎ、赤い炎が現れる。

「イメージしてください。炎はないという元々の理にもどす。ま、日常でも思い浮かべててください」

振りかぶり、投げるようにしてその炎を飛ばしてくる。

勢いよく、頭ひとつぶんくらいの大きさの炎弾が迫る。

「なんかよくわからないが…… R e s i s t ! ! 」

叫ぶ。

その瞬間、炎が消え失せた。

散るように、細かく、薄れて、消えた。

「m j k」

驚いた様子で私を見つめる時田。

「どうしたんだ、時田？」

「先輩……才能に溢れてやがりますね。呪……祝ってやる」

「そこ、自分だけわかるからとマンガみたいな台詞回しやめい」

「ふひひ、さーせん」

今日も時田はいい調子だ。

「さて、先輩……魔法使いになりましょうか」

「ようわからん。勝手にしてくれ」

私に近づいて、私の手をとる。

「Awake the wisdom」

「……」

いつものようなふざけた印象は皆無。  
ただ、真剣に唱える。

「From I to you」

「Resist」

「ちょ、なにしてんすか。打ち消さないでくださいよ」

「いや……つい」

「つい、とか。つい、とか」

先程のようにキャンセルできるのかな、と考え、やってみたが、思った通りできたようだ。

怒るのも仕方ない。彼は真剣にしてくれているのだ。興味本位でふざけたことは反省しないといけない。

「ごめんごめん」

「ま、その考えがわからんでもないんですが」

同じ詠唱を繰り返す。

「To you」

私達を中心に光の輪が描かれる。

シンプルな、ただの円。

魔法陣というにはあまりに単純でつましい。

「すこし、気持ち悪いですが、我慢してくださいな」

膨大な光が私達を包んだ。

特になにもない日々

「そうだ、鍋をしよう」

「断る」

由紀の思いつきを却下しつつ、温め直したぜんざいを炬燵と炬燵周辺でくつろぐ仲間達にそれぞれ配った。

部屋の中は暖房、炬燵、電気カーペット、と正直少し暑いくらいだ。部屋はけっこうな広さなのだが、やはり十人もいれば少し狭く感じる。

「ならトランプだよ」

「ならそこにある」

そう言つてタンスの上あたりを指差す。

そこには小物入れが置いてあり、色んな物を入れている。

「とつて！」

「おのれで取りなさい」

「えー」と言いつつ、立ち上がって持つてくる。

「もうひとつないの？」

「書齋でみた気がするが」

「寒いよ、とつてきてよ」

「仕方ないな、とつてこよう。書齋にはあんまり入ってほしくないしね」

「仕方ないわね、私がとりにいくわ」

「何を期待しているのか知らないが、散らかっているというだけだからな？」

「きいちやいねー」

いつもの事だが、話が終わる前に消えていた。

廊下のほうから「うおおお、さむいいい」とか聞こえてくるが気にしない。

みんなと雑談を交わし、由紀が戻るのを待った。

「玲殿がいう『インターネット』なるものをしてみたいのだが」

「使えるけど、使えない、かな？」

ネットは凍結しているからな。

「玲、なかなかの隠し方だったわね」

由紀が戻ってきた。右手にトランプ、左手に本を持ち、居間の扉の前でその二つを掲げる。

どうでもいいのだが、扉を閉めてくれないだろうか、寒い。

しかし、換気に丁度よいか。と考え、由紀の話に付き合ってやる。

「して、なにをみつけた？」

「まさか、普通に本棚に収納しているとは……恐れ入ったわ。まだまだ甘いけどね」

「由紀はもう少し人の話を聞くことを覚えような」

「玲は年頃なのにやけに大人びているから、この手の本はないと思っただけど、いやいや、むしろ大人の嗜好品かしら」

この手の本……つまるところ成人向けの本であろうが、生憎と私はそのような本を持っていないはずだ。

もしかしたら、こちらの世界を解き明かすキーアイテムなのでは。そんな思考を巡らすも。

「医学書じゃあないですか」

そんなところだろう。

由紀よ、私はなんだか悲しい。

「甘いわね、玲。これにエロを見いだしているんでしょう?」

確かに、人の裸体なども描かれているが、飽くまで図解であり、他意があつてのものではない。

「著者と私に失礼だな」

「うは。それはもう飯三杯はいける」

時田よ、どうして絡んできたのだ。

「あー……それよりもさっさとこちらにきてトランプをしようではないか」

「そうね」

自分で無理やり感がわかっていたのか、医学書を後ろに放り投げる由紀。

本を大切にしたい。

丁度換気ができたところで扉を閉め、私の隣に腰掛ける。由紀もその意図で開けていたのかもしれない。

変な所で気が付く奴だ。

「掘り炬燵いいー」

正面に座る村上さんが呟く。悦楽の表情で台の上に突っ伏していた。

何はともあれ、その意見には賛成だ。

普通の炬燵のように寝っ転がれない難点もあるが、それを差し引いても掘り炬燵はいいと思う。

「レッツ大富豪」

「定番だな、私は好きだけど」

皆が集まる毎にやる定番のゲームになりつつある。

おかげでルール説明もないで済むのではあるが、如何せん、同じゲームは飽きがくる。

私はいいが、みんなが嫌と言えば、ゲームを変えなければならない。

「「「いえーい」」」

それも杞憂に終わる。みんなノリがいい。

「さて、特殊カードの確認。五スキップ、七渡し、八切り、十捨て、Jバック、スペ三返しあたりでいいわね？」

特殊カードは増やそうと思えばいくらでも増やせるが、あまり多いと逆につまらなくなる。

トランプは二つあるので、五、五に分かれてやるのがいいだろう。

「階段あり、階段革命あり、joker革命ありでいくわ」

革命にも色々ある。私の知っている特殊な革命は九を三枚出してクイーター、七を三枚でななさん革命。

などなど、無理やり感溢れり革命も少なくはない。

「それじゃあ、大富豪と富豪はあとで大大富豪決定戦ね」

要は勝ったもの同士で決定戦をしようというのか。

「あたし、玲、雫、光一、一馬。のグループと、時田、そら、ゆかり、アイリス、クロエのグループね」

「あんたら、いい加減、俺を名字で呼ぶのやめませんか?！」

「時田は時田だ」

「先輩エ……」

悲しそうな目で私を見る時田。

確かに時田には、妖という名があるが、なぜか皆、時田としか呼ばない。

キャラの問題だと思う。

「じゃあ、妖。うわ……違和感しかない。時田よ、やっぱり時田よ」

「私もそう思う」

皆々、それに同調するように頷いた。

「わかりましたよ、時田でいいですよ」

やけくそ気味にいう時田は少し寂しそうだった。

## 特になにもない日々6

「運いいな、おい」

じゃんけんで最初になった由紀は「ワンターンキル!!」などといって、カードを出し始めたが、本当にワンターンで上がってしまった。

十を四枚にjokerを二枚出し、特殊効果によりカードを六枚捨てれるので手札はそれではなくなった。

「勿論、六枚でも革命よ」

私の手札は、二が三枚、エースが二枚、九が一枚、七が一枚、五が三枚、三が一枚。

はつきりいつて微妙な手札だ。革命前ならばかなり強い手札であったのだが。

十とjoker、捨てた札はJを四枚。

どれだけ運がいいんだ。

「流すぜ!!!!!!」

「テンションたかいな」

光一は相変わらずだ。

由紀の次は光一で、その次が私、後に村上さん、一馬と続く。

「俺のターンだよな!!」

二を一枚。だし方としては順当か。

続いて私が九をだす。

六、四ときたところで一度切れる。

一馬は七を二枚だし、次の光一に二枚手渡す。

光一は八で切り、七で私に五を渡してきた。

「ナイスだ光一」

「よくわかんないけど、どういたしまして!!」

親指を立てると、ニカツ、と歯が輝きそうなくらい眩しい笑顔を返してくれた。

七を使い、一を村上さんに手渡す。

六、四、三と続いて切れ、またも光一から。

六を出したので、すかさず三をだし、私のターン。

五を四枚出し、革命。だすものがいなかったので私のターン。

「うっそおー!!」

光一が嘆く。三や四でも持っていたのか。

二を出す。jokerはすでにでているので出せる者はいない。

一を出して、私が二番。

「期待通りね、玲」

「玲つよっ」

一馬がこぼす。

「大富豪は強いぜ」

謙遜はしない。大富豪は強いと自負している。運を含めて。

「すげ」

後のゲームは特に山場もなく、強いカードを持っていた一馬が三位、うたた寝しながら参加していた村上さんが四位、ビリが光一であった。

「やる気ないわね、あんたたち」

暇つぶしの一環なのだから仕方ない。

「頂上決戦ね」

由紀、私、アイリス、クロエでの大富豪。

「そうね、なにかないと燃えないわ。一位には最下位を自由にでき

る権利とかつけましようか」

「定番だの。いいな」

定番は面白いから定番たるのだし。

「由紀様」

「なーに？」

「「一等は、最下位になにをしてもよろしいんですか？」」

「ええ。何しても、何させてもいいわ」

「アイリス、アキラを自由にできるそうよ」

「やったー。勝ちましょう！！ クロエねーたまー！！」

「この姉妹は勝った気ですね」

「時田、本気でやれよ……」

「いや、実際手札悪かったんすよ」

「魔法は？」

「俺をチーターみたいに言わないでくださいよ」

「悪い悪い」

「まあ、それはいいんですけど。先輩、あの姉妹には気をつけてくださいよ」

「アイリスの方はよくないか？」

「先輩、なにを言ってるんですか、アイリスのほ」

「アキラ、はじめましょ」

「あ、ああ、時田は大丈夫か？」

すごい速さでクロエが時田にボディブローを入れたように見えたのだが。

返事はないが、時田を信じよう。

「くつくつくつ」

「なんだ、ゲームを変えるのか？」

由紀が突然笑い出したので、なんとなくそう思い口にする。

「よく分かったね」

「や、なんかな……」

よく考えたら怖い。以心伝心とかではないのだが。

「二対二のチーム戦にしましょう」

「チーム戦好きだよな、由紀」

「負けたチームは片方が生贄となるわ」

「負けたときの予防線張るなよ。私を差し出す気満々だろ」

「なにをしますの？」

クロエの疑問は当然だ。第一、トランプで二対二とかあったらどうか。

「私発案の『トランス』やるわよ」

「なんですかそれは」

「カードバトルよ」

「はあ」

つまりどうということだ。

「トランプをまず、黒と赤に分け、それぞれにj o k e rを一枚ずつ」

「カードバトル……デッキと？」

「そうそう。端的にいうと、数字を強さに見立て、相手の持ち点を削り、零にしたほうの勝ちというゲームよ」

「基本ルール、最初に互い三枚カードをひく。手札ね。バトル場には最大三枚、自分を守るためにカードをおけるのだけど、そこには

一枚。カードをバトル場に出すにはその強さに見合ったコストがいるのだけど、そのコストを置く場、無限」

「持ち点は五十、零になったら負け」

「ながつたらしい説明だな」

「仕方ないでしょ。続けるわよ。カードには特殊カードがあって、数字の小さい一から五までのカード。あとjoker」

「ま、単純にすると十三が最強だもんな」

そう考えるとよくできているとおもつ。

しかし、ルールを覚えるのは面倒だ。

「エースはキングに勝てる、二は相手のシールドを破壊できる、三は相手の場の最強カードの強さを三下げる、四は出したとき相手のコストを四削る、五はjokerの効果が無効にできる、jokerは相手の全ての場を流す」

「シールドは手札からノーコストで出せるわ。もしそれが特殊カードなら効果を付加した上での差し引きになる」

面白そうだった。

「本来は一つのトランプを二つにわけけるけど、トランプが二つあるから、二人で一つをつかうことにするわ」

「持ち点というのは？」

「これは五十で、バトルで負けた差分が削られる。勿論、自分を守る札がなければダイレクトな数値が削れるからね」

「基本はこんなことはこんくらいね」

「やるのがはやいな」

「一度練習でやってみましょう」

「そうだな」

## 彼女の流儀

「はい、今回のミッションも至って簡単！」

「ミッション……みつしょん、醤油のことか？」

「光一、無理がある」

「今回は団体戦よ！」

「団体戦とな」

壇上の由紀の声はよく通る。

私は今回何も知らされていないので、真剣に話を聞かなければならない。

「そう、五対五、代表を選んで三本先取」

「形式は？」

「相手を気絶させたほうの勝ち。武器はなし。他、制限なし」

私はきつと強制だろうな。武器なしならば特に。

「私、時田、玲、クロエ、アイリスの五人でいくわ。異議は認めない」

「アイリスより一馬のほうがよくないか？」

「はあ……玲、あなたは時々私をがっかりさせるわね」

「む、失礼な奴め」

わざとらしく額に手を当て溜め息をつく由紀。このように、身振り手振りが多いのはいまにはじまったことではないので突っ込まないが。

「アイリスに失礼でしょう？」

「……すまない。確かにそうだ」

子供ではあるが、彼女も仲間に対等な関係であることに変わらない。

「ごめんな、アイリス」

「えへー、きにしてないよー。えい!!」

掛け声とともにアイリスが飛びついてきたので受け止める。

私の背丈の半分もないこの子は、大変無邪気で可愛い。

親のような気分で接していた。

「ありがとうな、お詫びの印に後でお菓子を作ってプレゼントさせてくれ」

「わーい!!」

以前作ったキャラメルにアーモンドを混ぜたお菓子を彼女が大変気

に入ってくれたので、何かにつけてはプレゼントしている。

そのたびに笑顔で「おいしい」と言ってくれるのがとても嬉しい。

「場所はいつもの川、集合時間は正午、もし遅れたら私から心のもった蹴りを進呈させてもらうわ、解散！」

「「「ういー」」」

どやされたくないので早めに向かうとしよう。

ただその前に家に帰る必要がある。

家がある場所は川とは真逆方向なのでいそがなければ。

アップも兼ねた家までのランニング。大学からそこまで距離があるわけではない。

家から必要物を持って川へと急ぐ。

次の門を曲がると土手に出る。そんなところでみてしまった、人が倒れているのを。

「どうしんだ？」

慌てるよりも落ち着いて対処するのがよい。

例えこの世界で死んでも生き返る。それどころか病気も怪我也完治するが、それでもほっとく気にはなれない。

痛いとかなんだとか感じてる間は苦しいから。

「胸が……痛いの」

病院はない。

私には医療知識がない。簡単な怪我の処置はできるが、病気だとうしようもない。

「分かった、とりあえずここじゃ冷えるからどこかに運ぶぞ」

大学には設備があつて安心できるが、ここから大学まではかなり距離がある。

私の家に運ぶことにしよう。

「少し辛抱な」

私に背負われる彼に断ってから全力で走り出す。

できるだけ揺れないように配慮はしているが、少しは我慢頂こう。

「う……」

呻きが聞こえた。ちらりと顔を窺うと目を閉じて苦しそうにしている。

家に着いた。早々にベッドに横にする。

声をかけても返事はない。気を失っているようだ。

苦痛でだろうか、顔を歪め、胸の辺りを手で押さえて左右に身をよじる。

「汗だくだな……」

代えの服はないが、このままでは体が冷えてしまう。

嫌だろうが、私の服で我慢してもらおう。

服を脱がしにかかる。

そして、上着を脱がしたあたりで気づく。

……女。

よく顔を見れば雰囲気も女性らしい。

色々、迂闊であった。

「ままよ、ってか」

下着は脱がさず、楽そうなシャツとズボンを着せる。

すこし落ち着いたのか、先ほどよりも顔色はよい。

「悪い、そろそろ時間だ」

お粥を作り、彼女の近くに置いた。

聞こえていないだろうが、彼女にそう残し、家を離れた。

川までは全力で走って五分。

ちなみにあと三分で正午だ。

おかしいな、時間が足りないや。

「これには理由があつてだな」

「とーう」

突然、風景が遠のいた。由紀のドロップキックが私に炸裂したのだ。

こんなこと前になかつたろうか。

「……つたたた」

「聞きましょう」

「いやいいですごめんなさい」

「さて、試合は対一で、川の中州で行われるわ。で、今は曇りだけど、雨が振り出したら流される覚悟しといてね」

「んな覚悟したくないですよ!」

「時田は一番最初だから大丈夫よ、多分」

「ええ!？」

「さつさと片付けなさいよ」

「結構な勢いのむちゃぶりですよね!!」

溜め息をつきつつ、中州へ渡る時田。

お相手は……。

「さとねか」

「時田」

魔法使い同士のバトルだ。これは見ものである。

「じゃあ審判は私がしようかしら」

由紀が言う。

対岸に並ぶ相手方もとくに異議はないようだ。

「武器なし、ただし物理的に使わない限りはよしとする。勝利条件は相手の気絶のみ。時間制限なし。バトルスタート!!」

合図と同時にさとねさんが駆ける。対して時田はそこから動かない。

「我は空。器である。この体は常に満たされず、常に彼の者の者の傀儡なり」

「invalidity」

「なっ!!」

何かに驚くさとねさん。

今の単語の訳は『無効』さとねさんの魔法をうちけしたのだろうか。

「I a s t , R e : s p e l l」

勢いの止まらぬさとねさんに、正面に蹴りを突き出す時田。

手で受け止めるが、更に時田は足を上げ、踵落としの要領でさとねさんを攻撃する。

「相殺せよ、風」

さとねさんが唱えた瞬間、突風が吹いた。

そして、時田とさとねさんの間が一瞬、陽炎のように歪む。

さとねさんに一撃いれぬまま、後ろへ下がる時田。

「空気の層？ そんなもの、どれだけの大気を圧縮したんだよ。今吹いた風程度じゃ集まらないだろ？」

「さあ、どうしたんでしょう。あなたこそ、人の魔法を奪うなんて技、驚きました」

「やや、種あかすとき、無効にしたあとコピーしただけだって」

「言うほど簡単にできることじゃないでしょう」

「どうかな」

「我が名はさとね。応えよ、我と同じ真名をもつもの。我が意志、我が想い、仇なす者は目前の敵のみ。

王の名はさとね。付き従う者はおらず、ただ一人あるのみ。故に我が世界の理は我。唯一にして無二の王」

## 時田の授業2

魔法とは、魔力という膨大すぎるエネルギーを形にする秘技。

その力変幻自在。

形をもため、言わば万能の素材。

技法は無限。

魔法における知識とは、型であり、決まった方法はない。

最高の魔法使い。

世界の魔力を自分のタンクとして使える。

内に宿す力は無に等しくも、無限にある力を行使できる唯一の存在。

無尽蔵。

魔力が世界一なのだ。

敗北を知らうはさすがない。

「君が時田妖君かい？」

「誰だ貴様」

「なーに、わしはただの最強の魔法使いよ」

「はっ、最強？ 面白いね」

「誉めるな誉めるな。照れるだろ」

「ああ？ 女、俺になにか用か？」

「なに、君の友達になろうかとね」

「友達い？？ 馬鹿じゃねえの？？」

「なんだとてめえ、わしはこれでも成績良かったんだぞ！」

「はあ」

「どこへいく」

「帰る」

自分で理論を創り、頭の中以外で再現する。

誰でも使える。

子供の遊び。

「……またあなたか」

「友達の名前くらい呼んでくれよ」

「いつ友達になった」

「出会った日だろ？ おかしなことを訊く」

「はあ」

必要なのは、

「師匠！」

「お前も来るか？」

「俺は……」

「ふつ、迷うだけの未練があるならやってこいよ」

「俺はあなたと居たい！　ずっと居たい！　好きなんだよ！　少し年上っただけで気取るな！　友達なんだろ！」

「はは……滅茶苦茶だぞ。わしもな、妖と……」

「くそつたれ！！」

- - -

- - -

- - -

暗転。

頭がぐらぐらとして気持ちが悪い。

瞼が重い。

倒れないようこらえながら、ようやくと目を開く。

眩しい。

外だろうか。

頭はまだはつきりしない。

「玲先輩、ごめんなさい」

「いった!」

右頬にひりひりとした痛みが走る。張り手?

「いてえよ! 時田!」

「謝ったじゃないすか」

「なんだよいきなり……あら」

足の力が抜け、私はその場にへたり込んでしまう。

「あれ?」

「立てないと思いますよ」

「力入んねー」

実際は喋るのにすら違和感がある。

「頭に負荷がかかってたんで、その副作用です。一過性のものですよで一時間もしたらなおるでしょう」

「そうか、じゃいいや」

入り切らない力を完璧に抜いて、その場に大の字で寝転がる。

気づけば夕方だ。

空は夕焼け色に染まり、一番星が輝いていた。昼間暖かったが、いまは肌寒い。

私を見習ってか、時田も寝転がった。

少しだけ間を開け、同じ空を見上げる。

「つかれたー!!」

「なにをしたんだ？」

「先輩の世界のインターネットを時々使わせてもらっじゃないっすか」

「んあ？ ああ」

「DQNだとか、リア充だとか、それで覚えたんすけど……ってこれは余談でした。P2Pの技術はわかりますよね？」

「共有ソフトのあれか、わかるぞ」

「シーダーだとかリーチャーだとか、ようは大元のデータを持つて人から小さなデータをうけとり、受け取った人がさらに配る。そうして高速に共有が可能になってるわけですが」

「ああ」

「二人でP2Pやったようなもんです。ちゃんと、魔法の知識あるでしょ？」

意味が分からない。

だが、よく考えると魔法がなんであるかが理解できる。

先ほどの魔法か。

「どちらかという同期って感じだな……」

「あー、なんといいですか、これ大人数でもできるんすよ。そのときの方法がP2Pと同じでして、ただ……」

「ただ？」

「すみません、処理に必要な演算を先輩の頭使ってやりました。ついでに言えば先輩の知識とか流れてきたんでほぼシンクロナイズです」

「ああなるほど」

「あれ、怒らないんすか？ 先輩の記憶を覗いたようなもんなのに」

「知識は共有したほうがいいからな。そしてお前の記憶もみたぞ」

「あれダミーです」

「歯を食いしばれ」

「やや、怒らないでくださいよ」

「と、理論は組み立ててみたがどうするんだ？」

「はい？」

「自分で理論を組み立て使うんだろ？」

「はあ……まあ」

「使ってみたいんだが」

「え？ もう組み上げたんすか？ 自分で決めれる自由式とは言っても矛盾があると使えませんよ。俺でも一年はかかりました」

「いや、綻びは多分ないと思うのだが」

「じゃあ使ってみるといいとおもいます。無理だと思っけど」

息を吸う。

そうだ。自分を回復してみよう。条件は当てはまっている。

意識を集中する。現実と完全に同調しなければ奇跡は起こせない。

一度だけ、自分の世界を空にすると、一気に自分の世界をこの世界に押し付ける。

染め上げる。塗り替える。組み替える。入れ替える。作り替える。

「言葉には制限がないなら」

無常な数字の流れ。

数多、無限といえる膨大な数字の変化。

その中から指定する。

自身を。

一番変動幅の大きなものの数値を書き換える。

暗転。

刹那の間。

それは齟齬を噛み合わせるのに要する時間。

「よっ」

体が楽になった。

むしろいつもより快調だろうか。

アップの後のような感覚だ。

「え？ え？」

驚きであらうか、時田が目を丸くする。

それはそうか、詠唱した様子が私にはなかったのだから。

「さっきの『言葉には制限がないなら』が詠唱……？？」

「そう。会話中でも術式を組めるぞ」

「あんた天才だよ……いや、感動した。師匠や俺並、それ以上かも  
しれない」

「この方法使ってみるか？」

「いえ、他人の技法は理解仕切れないんで同じ展開はむりっすよ」

「ああ……」

## 彼女の流儀 1

「不思議空間 k t k r」

二人の周りを闇が包み込む。ドーム状の大きな黒い塊が現れた。半径はざっと十メートルはあろうか。

外からは何も窺うことはできない。中はどうなっているのだろうか。幸い声は聞こえるのだが。

「時田、あなたとは因縁があります。今日は決着をつける機会もてて光栄です」

「肩肘張った人が苦手な件」

「本気でお願いしますよ」

「働きたくないでござる！ 絶対に働きたくないでござる！..」

「いきます」

「なんだか俺、ネタ的に孤立するよな」

「詠唱”を”高速化”」

「”空気”を”圧縮”」

「.....」

「 ” 空 気 ” よ ” 叩 け ” 」

時田の呻きが聞こえる。何があつたのか。

仲間達も心配そうに黒い玉を見つめていた。

「 A …… 」

「 ” 魔 法 ” を ” 停 止 ” 」

「 …… id . あらま、発動しないや。わかつたわかつた 」

「 ” 魔 法 ” を ” 蓄 積 ” 」

「 R e a d y 」

「 血の代償は契約の証。 ならば汝は応える義務を有する。 澱みの世界より来たれ 」

「 …… p a r a l l e l   w o r l d 」

「 内包するは深淵なる闇。 彼の者は生を望み、それを差し出す。 王との契約は絶対 」

「 3 」

「 我は力の空蝉。 故に虚構の力を行使する 」

「 2 」

「宴は続く。旅人は足を止め、美しい様に心を奪われよう」

「1」

「時田妖の魔法”を”無効”」

「0」

「じゃ、まあ、俺の勝ち」

「なにを……」

黒い塊が弾け、二人の姿が見えた。

どうなっているのか。

「なぜ?!」

目を丸くし、心底驚いた風に声を上げる、さとねさん。

「すごいすごい。世界創造の能力か。以前会った時はそんなことできなかったよな? やっぱリミットがないから?」

「煩わしい……煩わしい……」

「怒らない怒らない。まだまだ修行すればいいだろ?」

「私は、あなたのような天才ではないんです。道具に頼り、時間をかけて策を練っても容易くうち碎かれる。そんな才知溢れるあなた方が心底腹立たしい」

「む」

「しかし、如何なる天才でも努力をしてない者はいないでしょう。天才の一時間が凡才の百時間に相当しようとも、私は諦めたりしません」

「そうかい。頑張んな」

時田にしては真面目な物言いだった。

それからの時田は一切のおふざけを排したように、恐ろしく圧倒的であった。普段、全く力を入れていないとしか思えない。

時田はさとねさんのすべての技の原理や効果を見破り、その上でそれを完全な形で無効にし、自分の技を披露する。

わざと後手に回り、すべてを見抜く。それが時田の戦法だ。

そう。数分の間に決着はついた。

最後は魔法で眠らされた。

「ただいまっす」

「いつもあれくらい力入れて生きろよ」

「だが断る」

「……いいんだがね」

「玲、出番」

「おう」

川に足を踏み入れると、とても冷たかった。体温を取り戻そうと無意識に身を震わした。

中洲へと渡り、相手の到着を待つ。

まもなく相手方からもひとりが踏み出した。

悪寒がした。

目の前を歩くものが、その足を踏み出す度に。

身じろぎひとつ許されないような緊張感。

理屈などなく、怖いと感じた。

気持ち悪い。吐き気を覚え、口元を押さえた。

この感覚は何だろうか。私は経験したことがない。

「ははは、こえー」

「ルールは同じよ。じゃあ始め!！」

「おえ」

由紀の合図、しかし踏み出せない。先に動くのが怖い。

手が読めない。

「あ……な、たは……あき……ら、？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0062p/>

---

素晴らしき、自由な世界

2011年1月29日11時16分発行